

3825 地球のかおり：「望白山車」(産経新聞)・心模様

アラスカ鉄道。南の港町、不凍港のスワードから、
北極圏に近いフェアバンクス、約 750 キロ。
夏の観光シーズンには、展望車を連結。世界中から人が集まる。
駅頭での出発風景は、おしゃれな情景。車内からの景色も素晴らしい。

眼前の光景は、マッキンリー山 (6.194m)

デナリ公園を訪ねて、フェアバンクスへの帰り道。少しだけ、山に登った所。
平地からでは、手前の木だけ。アラスカにしては、好天気の種類である。
右にかすかに線路が見える。

いつものように、上に登ればどのように見えるだろう。好奇心がうずく。
もう、登りだしていた。何しろ、単身での旅スタイル。
知らぬが仏。紙一重で助かった体験がある。
それ以降、熊との遭遇は、ご免こうむりたいとの思いがある。
しかし、思わぬところに出現。その後、熊には、何度も遭遇している。
アラスカを訪ねて、熊に遭遇しない方が難しい。
なぜなら、そのような地を訪ねている。そのような旅の仕方をしている。
自己防衛の自己責任。

思いの所まで登ってみた。ベストポジションを得るのが難しいようである。
何気なく目に飛び込んで来た、木々の向こうの白い山。
アラスカの天候は、思い通りにならない。曇天だが、雲は一面、グレー一色。
見通しも悪くない。主役、脇役、借景、構成、光に影、色彩。

ここで列車が登場してくれると有り難いのだが、展望車が来る時間帯でもない。
来てくれたらいいのに・・・ しばし、休憩することにした。
持参の美味しい水をひと口、実に美味しい。京都弁で、ほっこり。ぼんやりと忘我の時。
宿のあるフェアバンクスに戻って、今夜は何を食べようか。
数日、厳しい戦いをして来た。

ホテルで食べようか。素敵なレストランを探そうか。肉の味は、今ひとつ。
そんな思いで、時を過ごしていた。眼前の光景には、あまり希望を持ってなかった。
希望を持ちすぎると、失望が大きい。美味しいものを食べ過ぎたというか、
素敵な光景を見過ぎた。鈍感にならないことを願うのみ。
遠方に臨む白い山。蛇行する川の流れ。捨てがたい。

その時だった。動くものが見えた。珍しい黄色。これは有難い。絵になるかも知れない。
写生画を念頭に、デフルメしない真実。静と動の組み合わせ。
先頭の機関車の色が黄色。色彩の黄色が参入してくれたことで、俄然、面白くなった。
次は画面構成。構図として、右、三分の一の所に、先頭車両が来る。
タイミングがいいかも知れない。私自身は、足元が険しい。動ける状況ではない。
その瞬間、どのように見えるかは、想像の域で、わからない。運が左右する。

山脇の線路も蛇行。先頭車両が、山かげに入ってしまうそう。
間合いをはかる瞬間である。私の思いは、たった一枚。一期一会の瞬間。
瞬きは待ってくれない。自然は思い通りにならない。運が良かった。
超ラッキーとは行かない。

今回のアラスカ一人旅は、ことの外、厳しかった。
この作品から、いろいろな体験が思い浮かぶ。2倍3倍、楽しめる。
取材も楽しかったが、今、文章に書いている瞬間も楽しい。
チャンスを頂き、お礼を。まさに、一生懸命、無我夢中のひと時。楽しい時間だった。

厳しかっただけに、今は、いい思い出、心の財産。